

Global Sessionレポート(8月7日)

期日:2022年8月7日(日)10:30~12:40

場所:ガレリア3階 会議室

ゲスト:濱田雅子さん(神戸からオンラインで参加)

(元武庫川女子大教授・アメリカ服飾社会史研究会会長)

テーマ:「写真が語るアメリカ民衆の装い(その3)ー1870年代の民衆の生活を垣間見るー」

コーディネーター:亀田博さん

参加者:オンライン:濱田雅子さん&KYさん

亀岡で:MHさん(薬剤師)・CEさん(日本語教師)・

HMさん(日本語教師)・

WSさん(外国人のためのキャリアアドバイザー)

児嶋きよみ 8名

亀田さん:GS シリーズは353回目で濱田さんシリーズは、23回目になります。

濱田さんの話のあとで、質疑応答をし、12:30に終了予定です。

濱田さん:話は1時間10分の予定です。

GSのご案内と併せてお届けした概要とこのレポートを読み比べていただければ幸いです。

1 全体構成

本講座の全体構成は、次の6項目

1. 濱田雅子の新刊書出版のお知らせ 内容紹介 クラシ参照
2. 1870年代の歴史的背景
世界情勢
普仏戦争 アメリカの服飾への影響
1870年代アメリカの歴史的背景 南北戦争と南部再建
南部再建の挫折とファッションの関わり
3. アメリカの産業技術史ーミシン パターン 既製服
4. 1870年代ヨーロッパの服飾
5. 1870年代写真に見るアメリカの民衆の装い

階級的視点からみた女性服

既製服:男性服 子ども服

移民の服装

6. まとめ

1. 濱田雅子の新刊書出版のお知らせ 内容紹介 チラシ参照

(1) 2021年11月28日から『写真が語るアメリカの民衆の装い』というテーマで、濱田雅子の「服飾からみた生活文化」の講座を開催して参りました。今回は3回目(濱田雅子の「服飾からみた生活文化」シリーズ第23回)となります。お陰様で本講座の基礎的文献である濱田の新刊書『写真が語る近代アメリカの民衆の装いーGuidebook of Joan Severa: Dressed for the Photographer, Ordinary Americans and Fashion, 1840-1900-』(株式会社 PUBFUN 2022年4月15日)も無事、出版に至りました。本書は、濱田のライフワークであり、思えば、激動の空間と時間をくぐり抜けて、誕生に至りました。何か一つでも欠ければ、このような書物をPOD出版することは能わなかったものと思われまます。

原書の入手、翻訳、本書の執筆に26年、かかりました。その間、阪神淡路大震災でマンションが全壊した両親の支援、両親が他界、自分自身の闘病生活(脳内出血)、引っ越しなどを掻い潜って、本書の誕生に至りました。ずっと手放さずに、取り組んで参りました。

私のささやかなライフワークです。亡き父(小川政恭、ギリシャ文学研究者、神戸大学名誉教授)の「雅子、研究をやめてはいけないよ」という言葉をとても大切にして参りました。

アマゾンのカスタマー・レビューをご一読下さい。

<https://www.amazon.co.jp/gp/product/4802082711>

本書は商業出版物ではなく、POD出版物です。用語解説、注、索引をつけた学術書です。

下記のホームページに“ A Look at Old Photograph”と題する You tube の動画をご紹介します。

Joan Severa 女史(1925-2014)による貴重な写真解説です。

<https://www.american-mode.com/>

(2) 濱田雅子著『アメリカ服飾社会史』重版出版の背景

初版が東京堂出版から発行されたのは、2009年6月のことです。多くの読者の皆さまのおかげで、2015年には品切れになりました。それから、7年の歳月が経過して、このたび、ようやく重版の運びに至りました。本書の重版に当たって、初版の誤字・脱字の修正、内容の追加・修正、索引の添付を行ないました。このようなオンデマンド出版という新しい時代の出版革命に、いち早く呼応して、重版出来を認めて下さった東京堂出版の名和成人氏に心から感謝の意を表させていただきます。

【内容紹介】

本書では、植民者とともに渡ったヨーロッパのファッションは、アメリカという大地でどのような変化を遂げたのか？その独自のファッションがつけられる過程に迫ってみました。さらに20世紀において、パリモードからアメリカンモードへの転換がいかんにはかかれていったのか？アメリカン・ファッションの世界発信にも目を向けました。学術書的な読み物ではありますが、一般読者にも読みやすく、興味深い一冊をめざし、アメリカの民衆の衣生活を、以下の8つの章に分けて、社会史としてわかりやすく描き出しました。

わが国では、著者が38年間に渡って取り組んできたアメリカの服飾史研究の分野、とくに上流階級のみならず、中産・下層階級、アフリカン・アメリカン、先住アメリカ人の服装に関する研究は、大変、マイナーな研究分野であります。しかし、今や、貴族の煌びやかな服飾にだけ、目を奪われている時代ではありません。このファッションのグローバル化が急増した時代において、民衆の衣生活や生活文化史にも目が向けられなければならないのではないのでしょうか。

2. 1870年代の歴史的背景

(1) 世界情勢

- 1869 11.17 スエズ運河開通
- 1870 7.19 普仏戦争（～71.1）⇒後述
- 1871 12 岩倉使節団アメリカへ向け出発
津田梅子ら5少女もアメリカ 留学のため出発
- 1877 1.1 イギリスのヴィクトリア女王、インド女帝を兼ねる
2.15 日本で西南戦争勃発

(2) 普仏戦争（1870.7.19 ～71.1）

- 1870-1871年 プロイセンを主とするドイツ諸邦とフランスの戦争
- ドイツ統一をめざすプロセイン国の宰相ビスマルク (Bismarck) の挑発から、それを阻もうとするフランス皇帝ナポレオン3世 (Napoléon III) とプロセインが衝突し、開戦したのが普仏戦争です。この戦争は1870年、アメリカの南北戦争再建期に起きた戦争ですが、翌1871年セダンの戦いの後、ナポレオン3世はプロセイン王ウィルヘルム1世 (Wilhelm I) に降伏を余儀なくされる、という結果に終わります。
- 普仏戦争のファッションへの影響

この戦争の敗北により、フランスは大きな痛手をこうむりました。80年代に入ると、回復をたどり再び栄えるのですが、その10年間でさえも、フランスはファッションの発信地的な存在であったものと思われれます。しかし、フランス中を苦勞と困難の渦に巻き込んだ普仏戦争は、アメリカとイギリスとはかなり違うとらえ方をされています。アメリカのファッション記者には、戦争やその結果についてあまり語られませんでした。反対に、イギリスにおいては英語雑誌で徹底的に話されていました。普仏戦争は、諸外国へのファッションの伝達を一時中断させた大事件でありました。

(3) 南北戦争と再建

【ファッションとの関係】

- 南北戦争がもたらした被害は莫大なものであり、80年代になっても戦債利子が予算の約40パーセントを占めることとなりました。再建がかなり困難であったことは、容易に推測できます。70年代は、戦争直後の『風と共に去りぬ』のラストシーンにみられる南部の荒廃した土地からの再建、復興のために国民があらゆる方面で力を注いだ時代でありました。
- しかし、結論からいうと試行錯誤された再建は失敗に終わりました。財政上の困難、共和党の失策、人種的憎悪、その上テロなど、あらゆる要因が結びつき、共和党体制は崩れていったのです。だが、最大の要因は、人種間の問題であったのではないのでしょうか。
- 1869 2.27 連邦議会、憲法修正条項第15条を発議

第1節 合衆国市民の投票権は、人種、体色又は過去における 労役の状態を理由として、合衆国又は州によって拒否又は制限されることはない。

第2節 連邦議会は、適当な法律の規定によって、本条の規定を施行する権限を有する。

1869 5.10 最初の大陸横断鉄道開通

1869 5.15 全米婦人参政権協会ニューヨークに設立

12.10 ワイオミング準州、初めて女性の参政権を承認

【南部再建と人種問題】

- 黒人に白人と平等の権利が与えられたとはいえ、まだまだ黒人に対する差別は色濃く残っていました。特に南部白人のそれはとても暴力的で、投票に行った黒人は脅迫されたり、ひどい暴行を受けたり、最悪の場合は殺された。70年代初頭までには、すでに再建の成功への道はとざされたのも同然でありました。しかし、70年代に入りしばらくすると工業の発達にともなう金儲けが人々の関心を違う方向へと向けたのでした。この後、1870年代から1890年代にかけての急速な産業の発展を背景とする、金がものを言う時代の“金ピカ時代”へと突入していったのです。
- 南部再建期の共和党急進派のスローガン：1867年、ジョンソン大統領とは全く対立した再建案が共和党急進派から出され、極めて急進的な再建法を成立させました。その翌年、黒人にも白人と平等の市民的諸権利を取得するための憲法修正第14条が、憲法で裏打ちされました。1870年までには南部諸州は連邦復帰を完了し、合衆国は10年ぶりに統一連邦に戻り、明るい兆しが見えたかのようにみえました。黒人にも選挙権が付与される憲法修正第15条や、黒人議員の登場、黒人を啓蒙する教育が生まれたのもこの年からです。しかし、当時の黒人の切実な要求は、「40エーカーの土地と1頭のラバを！」（貫堂嘉之、『南北戦争の時代』岩波新書、2019年、pp.143-144）という言葉でありました。まだまだ問題の山は崩れることはありませんでした。政治的・社会的には成果をあげたこれらの改革をもってしても、経済面、特に土地問題を解決するには至りませんでした。

【南部再建の挫折とファッション動向】

- 南部の再建については、多くの人々の努力もむなしく花を咲かせることができませんでした。その一方で、産業面上昇や資本主義的発展をとげ、アメリカではある程度経済的に余裕が見えてきました。それにもなつてファッション業界も発展してゆきました。流行に敏感な当時のアメリカ女性にとっても、流行の最先

端をゆくフランスのスタイルを取り入れるのが、大変容易になりました。しかしフランスのファッションを全て取り入れることができたのは一部の裕福な家庭の女性でした。当時アメリカでは、*Godey's Lady's Book*、*Peterson's Magazine*、*The Delineator*、*The Lady's Home Journal*、*Harper's Bazaar*などのファッション定期刊行誌が発行されており、これらの雑誌にはドレスの作り方が掲載されていました。中でも、*Godey's Lady's Book*には、フランスの上流階級の人々のスタイルが見られます。アメリカの女性は、フランスのスタイルに憧れを抱き、あまり裕福でない家庭の女性はミシンをフル活用して流行を取り入れ、また、それを楽しんだのです。このように、南北戦争、産業の発展、鉄道やミシンの発達、ファッション誌の発行、という過程を踏んでアメリカのファッション業界は変化と発展を遂げたのでした。

- ・ 南部再建の挫折

南北戦争がもたらした被害は莫大なものであり、80年代になっても戦債利子が予算の約40パーセントを占めることとなりました。再建がかなり困難であったことは、容易に推測できます。70年代は、戦争直後の『風と共に去りぬ』のラストシーンにみられる南部の荒廃した土地からの再建、復興のために国民があらゆる方面で力を注いだ時代であったのです。

しかし、結論からいうと試行錯誤された再建は失敗に終わりました。財政上の困難、共和党の失策、人種的憎悪、その上テロなど、あらゆる要因が結びつき、共和党体制は崩れていったのです。だが、最大の要因は、人種間の問題であったのではないのでしょうか。

黒人に白人と平等の権利が与えられたとはいえ、まだまだ黒人に対する差別は色濃く残っていました。特に南部白人のそれはとても暴力的で、投票に行った黒人は脅迫されたり、ひどい暴行を受けたり、最悪の場合は殺された。70年代初頭までには、すでに再建の成功への道はとざされたも同然でありました。

3. アメリカにおけるパターン・システムの発達

(1) 型紙の製図システムの開発

1870年頃までは男性服の特許の方が女性服の特許より多かったのですが、1880年に至る10年間で女性服の特許が急速に増し、男性服を逆転しています。この傾向が

1910年までつづき、1910年以後の10年あまりでほぼ同数となっています。

(2) 特許の実用性

特許の実用性について、キドウェル女史は「特許は考案され、利用されたシステムを代表するものではない。……ファッションの変化にともなって、特許が認可されたときには、時代遅れのものになっていたようである」とも述べています。型紙には、このような側面もあったのです。

(3) A・テントラー(Aaron A. Tentler)の1841年1月23日付け特許(U.S. Patent 1,944)

立体をなす人間の身体に合う、型紙を平面で描くのは、とてもむずかしく、A・テントラーは、穴をあけた道具を使用する割り出し式システムを考案しました。

(4) A. マクドウェル (A. McDowell) の調節式製図用型紙 (Adjustable Pattern for Drafting Garments)】

A. マクドウェル (A. McDowell) は、調節式製図用型紙 (Adjustable Pattern for Drafting Garments) を考案し、1886年5月18日に特許を取りました。

(5) デモレストパターン

・1876年のフィラデルフィア万博にはデモレストとバタリックの型紙をはじめ、合計12の製図システムが紹介されて見物客の注目を集めました。この時のデモレストの展示は、穴のあいた道具と何百枚ものサイズ別の型紙を用いたドレス裁断システムでした。

・デモレスト夫人とは？彼女のバックグラウンドを紹介。

・デモレスト夫人による型紙の発明

(6) バタリックパターン

・バタリックはアメリカで薄葉紙の型紙の大量生産に初めて成功した人物です。1863年、37歳のバタリックは、マサチューセッツ州スターリングで彼の最初の型紙を作成しました。翌1864年にニューヨークに引越し、J・ウィルダー (J.W.Wilder)、A・ポラード (A.W.Pollard) らとバタリック社を設立しました。

・バタリック社の型紙

(7) 型紙が家庭裁縫に与えた影響

(8) 中流階級の女性の衣服の実物の考察 調査日 2007年3月28日

写真撮影 濱田雅子

Goldenstein Design of Museumの所蔵品の調査：ウェディングドレス、デイ・ドレス、ハウス・ガウン。子どものドレス、その他、帽子

(9) ヨーロッパへ進出する両社

(10) 家庭裁縫と既製服

4 ヨーロッパの服飾 クリノリン衣裳からバツスル衣裳へ

当時クリノリンは、ナポレオン3世の皇后ユージュニが美しく着用していたため、拍車をかけて流行していった。特徴としては、布に張り骨として鯨ひげや針金をつけ胴から裾にかけて釣鐘状に形作り、スカートに膨らみをもたせたものであった。スカートは何段かになっており、そこに対照的な色で装飾を施し華やかに見せていた。バツスルは、宮廷デザイナーとして実権を握っていたF. ワース (Frederick Worth) のデザインによるものと伝えられており、また日本においては明治16年、鹿鳴館において貴婦人達が直輸入のバツスル・スタイルのドレスを着用していた。特徴は、後部を強調させたいがために今までの横の膨らみを後部へ追いやっている上に、装飾もたくさん施しているため、まるで重い荷物を背負っているという印象を受ける。ウェストは細く見えた。シルエットもクリノリンの時のふんわりしたものからシャープなものへと変化している。そして、バツスルを装うことによって後ろスカートが短くなってしまいうのである。バツスル・スタイルはアメリカにも伝えられ、上流階級だけでなく、中流階級の人々にもとりいれられる。アメリカの新聞のBrinker 201にバツスルに関する興味深い記事(Joan Severa, p. 296)がある。それは、教会へ行く際バツスルの代用品として、白い布片に新聞を詰めて紐でしばってまとめたものをバツスルとしていた、という滑稽な記事である。手作りにしてまでもバツスルを身につけており、もし、つけないで行ったときには場違いだと感じるほど必要最低限のもので、一種のマナーであったようである。

5 1870年代写真に見るアメリカの民衆の装い

階級別にみた女性服 金持ちの女性と労働者(新聞配達、織物工場の女工)の女性の服装

既製服：男性服 子ども服

移民の服装 ノルウェーとスウェーデンからの移民

ここに紹介したアンナのコレクションの45の遺品のうちの一着は、単にミネソタの歴史における一人の女性の仕事としてだけではなく、19世紀という転換期におけるスウェーデン移民の経験をも反映している。アンナは彼女の古い衣服や布片を、お金をかけないで保存することによって、ミネソタの一農場における日常生活史を、今日の私たちに残してくれたのである。



写真 スタジオ・
ポートレート
1886年頃
提供：The Valentine
Museum (C68.89.F),
Joan Severa, p.413



バススル(腰当)
Godey's Lady's Book July
1886
Accessible Archives

6 まとめ

- ①「1870年代に入ると、最初の2、3年は不景気で新しい服を購入するだけの余裕はなかったのだが、衣服に関して徐々にではあるが社会が全ての人に対して流行を追わせていた」と社会と流行の結びつきを示す見解がセヴラ女史の文献に述べられています。(Joan Severa, p.292, 295)。
- ②「輸送の発達のおかげで、何処に住んでいてもパターンや布地を手に入れることが可能となり…」、これによって地方だからといって良い物が手に入らないということはないのではないかと思われる。つまり、全ての人々が同じライン上に立たされたことになるのである。それゆえに、地方だから流行遅れになっても仕方ないというのは通用しなくなったのではなかろうか。」とセヴラ女史の文献に述べられています。(Joan Severa, p.293)。
- ③さらにもっと強い意見が述べられ、新しい服を手に入れる能力が重要視されており、「流行に遅れてしまったら社会追放を蒙るであろう…」とセヴラ女史は考えているのである。(Joan Severa, p. 294)。
- ④1870年代は戦後の混乱の中にあった1860年代と比較すると、生活水準も上昇し、また、社会の圧力もあったことから見ても、セヴラ女史の強い考えまでには達しないにしても、中産階級ほとんど全ての人々が流行を追っていたのではないかと推察できるのではないのでしょうか。

【参考文献】

- ① Joan Severa: Dressed for the Photographer, Ordinary Americans and Fashion, 1840-1900-, Kent State University Press, Ohio, 1995.
- ② 濱田雅子著『写真が語る近代アメリカの民衆の装いー Guidebook of Joan Severa: Dressed for the Photographer, Ordinary Americans and Fashion, 1840-1900-』(株式会社 PUBFUN 2022 年 4 月 15 日)
- ③ 濱田雅子著『アメリカ服飾社会史』(東京堂出版、2009) 品切れ
- ④ 濱田雅子著『アメリカ服飾社会史』重版(株式会社 PUBFUN 2022 年 7 月 26 日)
版元の東京堂出版から濱田が出版権を取得し、株式会社 PUBFUN からペーパーバックと電子書籍(7月19日)を出版。事項索引、人名索引も作成し、初版の誤字・脱字の修正、内容の補足修正。写真もカラー写真を20枚掲載。本書の重版出版により、濱田雅子の『アメリカ服飾社会史』シリーズ(1~4)のPOD出版と電子書籍が一堂に会した。
シリーズ1 『アメリカ服飾社会史』重版(株式会社 PUBFUN, 2022年7月26日)
シリーズ2 『パリ・モードからアメリカン・ルックへーアメリカ服飾社会史近現代篇ー』(株式会社インプレス R&D, 2019年)
シリーズ3 『アメリカ服飾社会史の未来像ー衣服産業史の視点からー』(株式会社インプレス R&D, 2020年4月)
シリーズ4 『20世紀アメリカの女性デザイナーの知られざる真実ーアメリカ服飾社会史続編ー』(株式会社インプレス R&D, 2021年4月)
- ⑤ 濱田雅子著『『アメリカ服飾社会史』シリーズ誕生への道のり』(アメリカ服飾社会史研究会会報 No.13 掲載) <https://www.american-mode.com> に電子版掲載

セッション開始:

亀田さん: 感想などをどうぞ。オンラインの吉川さんは、すでに退席され、チャットで感想が寄せられています。

KYさん: チャットでは、先生が衣服の制作者でもあられることが、研究におおいに資している旨、お伝えたく思いました。じっさい、型紙の解説などは、経験者でなければ指摘できない内容だったかと思っています。(メールより)

亀田さん: では、自己紹介がてらに感想をどうぞ。

MHさん：初めての参加で、ファッションは初めての分野で、服のデザインなどに接する機会が無かったです。6枚の女性の写真の説明がおもしろかったです。今の時代は、どこにも同じデザインで服があり、ブランドに関わりなく売られています。服のデザインによってその人の階級がわかるとは思っていませんでした。

濱田さん：中国出身の方は、西洋の服飾の歴史などを勉強されたことはありますか？

CEさん：西洋の服のデザインの歴史などは学んでいませんでした。母親が娘のころは、文化大革命（1966年～1969年）が始まったころで子どもも皆、同じ服を着なければならぬ時代で、私自身も、中学生になって初めて母親から花柄の生地ドレスを作ってもらいました。

児嶋：お母さんは、自分で洋服を作れたのですね。

CEさん：母親は、昔の日本人の工場に働いていて、昔の型ですが、ミシンで縫い、型紙の作り方も知っていました。

濱田さん：中国には中国服の歴史があるはずですね。チャイナドレスも変化してきているでしょうし、欧米の服の歴史とはまた、ちがっているでしょうね。

HMさん：ファッションの勉強はしたことがありませんでした。あの中で『大草原の小さな家』くらいを知っていたぐらいです。鹿鳴館時代の貴婦人の洋服を着たのを見たのも初めてです。

濱田さん：それも明治の初めで大政奉還が1867年10月14日ですが、1871年には岩倉使節団とともに、津田梅子ほか、5少女がアメリカ留学とありますね。大政奉還から4年後に女の子がアメリカに行っています。

アメリカでも中産階級の服飾の歴史の資料は少なく、ミネソタの写真は貴重です。

SWさん：デザインには興味があります。ミシンはないけれど、自分がやる気が出てきたら、自分の服も自分で直しています。今日の講座で、服飾の歴史を学びましたが、一部の金持ちだけの洋服であったのが、ミシンが発明されて、一般の人も自分で作れば作れるようになったという点は大きな変化だと思います。自分をアピールしたい時に、服で表現する方法もあるのだと思いました。今回の発表では、写真の発展も関係がありますね。現在は、余分の衣服を買い、捨てていくので、ごみの問題が起こっています。発展途上国へ衣類を送る運動がありますが、実際には、ごみの山が発生しています。環境問題も大切にしたい課題であると思います。

濱田さん：大量生産と大量消費の時代になり、たくさん作り、たくさん捨てられていますね。『アメリカ服飾社会史の未来像—衣服産業史の視点から—』（2020）でも環境問題について取り上げています。

亀田さん：中産階級の人々が洋服に興味を持ちだした時代と言えますね。ウエディングド

レスとか、子ども服とか、母親が作るとか。1870年代に明治維新後、鹿鳴館時代や津田梅子が留学したり、高級な洋服も日本にあったということが興味深いです。

現在は、コロナ禍の中、衣服もアフリカに送ることもできず、保管にもお金がかかってきているようですね。自分の町を離れなくてはならなくなった移民の多いウクライナにも運べないというようなことも起こっているようです。

中国と日本は、現在、鎖国状態のようになっていますが、これまでの工場や、中国製の洋服などはどうなっていくのかと心配です。特にアパレル業界は心配のようです。

濱田さん：これからは、余分な物は作らずに受注生産にすべきだと思います。店が空になるのもいけないし、これからの物が不足する時代を考えて真剣に取り組む必要があるのではないのでしょうか？

私が自分で作った洋服もあります。ホームページを見ていただくと見る事ができます。

児嶋：時間が来たので、今日はこれでおしまいにしますが、質問や感想がまだあれば、児嶋までお知らせください。ありがとうございました。